【郷土史への扉】

正興寺のお坊さん

近世後期の正興寺（「三国名勝図会」より）

正興寺

隼人町の宮内地区に、鹿児島神宮（大隅正八幡宮）に関係の深い正興寺というお寺がありました。鹿児島神宮と蛭児神社のほぼ中間、現在の宮内原用水路沿いにある墓地付近がその跡地と考えられていますが、明治維新の時の※廃仏毀釈で壊されており、はっきりした場所は不明です。禅宗系の臨済宗のお寺で、本尊は釈迦如来、大隅正八幡宮の三ヶ寺の一つです。三ヶ寺としては他に正高寺（真言宗）・正国寺（律宗）があり、いずれも正八幡宮の正の字が付きます。江戸時代までは神様と仏様が一体だったので、神官と僧侶はともに仕事をしていました。

正興寺が造られたのは、永仁年間（一二九三～一二九九）といわれ、三十九代のお坊さんには鹿児島に朱子学を広めた薩南学派の桂庵玄樹、四十代に雲叔、四十一代に文之玄昌がいます。桂庵和尚は漢文を読むのに返り点や一二三などの訓点を施した訓読法を考案した人物として知られています。文之和尚は島津義弘の外交顧問であり、鉄砲伝来の記録「鉄炮記」を著しています。

国際情勢と島津氏の動向

豊臣秀吉が中国・インドまで征服するというアジア征服の野望の第一歩として、朝鮮に攻めて行った文禄・慶長の役がありました。朝鮮側では発生した年の干支で、壬申・丁酉の倭乱と呼ばれています。一五九二年と一五九七年の二度朝鮮に攻めていきました。小西行長（秀吉に仕えたキリシタン大名）や虎狩りで有名な加藤清正、それに島津義弘（島津家十七代当主）も参加しています。秀吉は肥前に名護屋城（佐賀県鎮西町）を築き拠点とし、全国の大名が集められ、それぞれ陣地を造っています。

それより数年前の一五八六年、島津氏は豊後の大友宗麟を攻めて九州支配の寸前までいきました。大友氏の拠点、府内（今の大分駅周辺）はその時焼かれています。しかし、島津氏は翌年、豊臣の大軍に負けてしまいました。そのため、文禄・慶長の役には島津氏としては義弘が参加したものの、内心では非協力的でした。特に兄の義久は許儀後という明人がブレーンでしたので、なおさらです。

倭僧玄龍

その文禄・慶長の役の時、薩摩と明が合力して、秀吉を討ち取ろうという計画があり、大隅半島の内之浦に明の工作船が出入りしていました。その際、明人と交渉したのが、玄龍という正興寺の僧侶であったことが、中国の福建省の人が書いた「敬和堂集」という記録に出てきます。この「倭僧玄龍」が四十代の雲叔和尚か四十一代文之和尚なのかはまだ分かっていません。「玄龍」の名前は、島津義久の家老、上井覚兼の日記にも登場しています。

明人たちは、名護屋城に様子を見に行ったり、本国に情報を送ったりしたようです。それがばれてしまい、怒った秀吉が釜ゆでにしようとした時、徳川家康が仲介し、やめさせたといわれています。

明と薩摩の合力計画は、福建の長官が中央政府に取り次がなかったため、結局実現しなかったのですが、この動きを徳川家康も黙認していたことが中国側の文献から窺えます。

禅宗系のお坊さんたちは、貿易に携わるなど、国際的に活躍していたことが明らかとなっています。室町幕府が派遣した遣明船の責任者もお坊さんでした。正興寺のお坊さんたちも国際的な働きをしていたと思われます。

文責＝重

※廃仏毀釈…仏教を排除しようとする政策や行動のことで、鹿児島では仏教寺院や仏像が多数壊された。